

茨城県教育財団文化財調査報告第344集

# 大 沢 遺 跡

都市計画道路宿大沢線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 23 年 3 月

茨城県水戸土木事務所  
財団法人茨城県教育財団



茨城県教育財団文化財調査報告第344集

お お さ わ  
大 沢 遺 跡

都市計画道路宿大沢線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 23 年 3 月

茨城県水戸土木事務所  
財団法人茨城県教育財団



## 序

茨城県では、均衡ある発展を念頭におきながら、地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めています。

都市計画道路宿大沢線道路改良工事は、茨城県が笠間市内の混雑緩和を図るため、計画されたものです。

しかしながら、この事業予定地内には大沢遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成21年8月の1か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、大沢遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、笠間市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成23年3月

財団法人茨城県教育財団  
理事長 稲葉節生



# 例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成 21 年度に発掘調査を実施した茨城県笠間市美原 2 丁目 1470 番地の 2008 ほか<sup>おおよそ</sup>に所在する大沢遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査	平成 21 年 8 月 1 日～8 月 31 日
整理	平成 22 年 8 月 1 日～8 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	白田正子
主任調査員	小野政美
調査員	前島直人
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長樫村宣行のもと、調査員前島直人が担当した。

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 38,080 \text{ m}$ 、 $Y = + 43,080 \text{ m}$ の交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3… とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, …0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SD - 溝跡 SI - 竪穴住居跡 SK - 土坑 P - ピット

遺物 DP - 土製品 TP - 拓本記録土器 Q - 石器・石製品

土層 K - 攪乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 炉・火床面

●土器 ○土製品 □石器・石製品 ----- 硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各総量で記載した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。計測値の単位は m, cm, g で示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 竪穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。



# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
大沢遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 弥生時代の遺構と遺物	10
竪穴住居跡	10
2 その他の遺構と遺物	17
(1) 溝跡	17
(2) 土坑	18
(3) 遺構外出土遺物	19
第4節 まとめ	20
写真図版	
抄 録	



# おおさわ 大沢遺跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

大沢遺跡は、笠間市（旧友部町）の東部に位置し、涸沼川の支流である枝折川の沖積低地をのぞむ標高36mの台地上に立地しています。今回の調査は、都市計画道路宿大沢線の改良事業地内に当遺跡があることから、遺跡を記録保存するために、茨城県教育財団が発掘調査を実施しました。



## 調査の内容

960㎡の面積を調査した結果、弥生時代後期（約2,000年前）の竪穴住居跡2軒、土坑5基、溝跡1条を確認しました。当地域における弥生時代の遺跡は、発掘調査例が少なく、今回の調査により、貴重な資料を得ることができました。主な出土遺物としては、縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺・手捏土器）、土師器（甕）、須恵器（甕）、土製品（紡錘車）、石器（石鏟）などがあります。



北東側上空から見た大沢遺跡



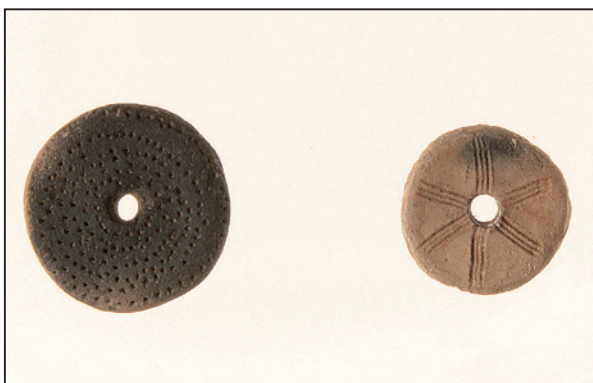
### 第1号住居跡完掘状況

弥生時代後期の住居跡です。床面から土製紡錘車が2点出土し、炉は2か所で確認されました。炉の周辺と火床面からは、石英の剥片が出土していることから、石器製作を行っていた可能性があります。



### 第2号住居跡完掘状況

第1号住居跡と同時期の弥生時代後期の住居跡です。炉や、柱穴が確認できなかったことから、住居というよりも倉庫のような特別な施設の可能性があります。



### 第1号住居跡出土紡錘車

床面から完形で出土した紡錘車です。2点とも全面に文様が施され、大きいものは、表・裏面に刺突文、側面には櫛歯状工具による施文、小さいものは表・裏・側面に櫛歯状工具による文様が施されています。



### 調査区完掘状況

上空から見た遺跡の完掘状況です。上が北西部になります。住居跡は、2軒とも南東寄りに確認できることから、集落の本体は台地の南東部に向かって広がっているものと推測できます。

## 調査の成果

今回の調査では、竪穴住居跡が2軒確認できました。出土土器は小破片がほとんどでしたが、二軒屋式土器（栃木県を中心に分布する土器）と十王台式土器（主に茨城県北部に分布する土器）が確認できました。当地域は弥生時代後期には小文化圏が入り組む地域であり、土器から地域間の交流が盛んに行われたことが推測できます。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、笠間市において都市計画道路宿大沢線の道路整備を進めている。平成21年4月16日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、都市計画道路宿大沢線改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成21年4月17日に現地踏査、平成21年5月13日に試掘調査を実施し、大沢遺跡の所在を確認した。

平成21年5月29日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に大沢遺跡が所在すること、及びその取扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成21年6月17日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成21年6月26日、茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県水戸土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成21年6月29日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して都市計画道路宿大沢線改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。

平成21年6月30日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、大沢遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、あわせて調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成21年8月1日から8月31日まで発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

調査は、平成21年8月1日から8月31日まで発掘調査を実施した。その概要を表で記載する。

月 工程	平成21年		
	8月		
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 注記作業 写真整理			
補足調査 撤収			

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

大沢遺跡は、茨城県笠間市美原2丁目1470番地の2008のほかにも所在している。笠間市は茨城県のほぼ中央部に位置している。市域の地形は、北東部が八溝山地から張り出した鶏足山塊に属する標高100～200mの友部丘陵、南東部が旧友部町域の大部分を占める標高30～40mの東茨城台地である。国見山付近に水源をもつ酒沼川が市域のほぼ中央を東流し、枝折川や酒沼前川を合わせながら酒沼に注いでいる。これらの中・小河川は流域に沖積低地を発達させ、現在では豊かな水田地帯となっている。

台地の地質は、基盤となる第三紀層は砂・礫・粘土層によって構成されており、上層には関東ローム層が堆積している。

当遺跡は、笠間市（旧友部町域）の東部に位置し、遺跡の北側には酒沼前川、南側には酒沼川が流れており、酒沼川と支流の枝折川左岸が形成した沖積低地をのぞむ標高約36mの台地縁辺部の緩斜面地に立地している。調査前の現況は、宅地と畑地である。

### 第2節 歴史的環境

ここでは、笠間市域のうち、当遺跡の所在する旧友部町域にしぼって、当遺跡に関係する遺跡を記述する。

酒沼川と北東部の酒沼前川に挟まれた台地は、縄文時代から人々の生活の場であった。これらの河川に面する台地の縁辺部一帯には広く縄文土器の散布地が認められ、旧友部町域だけでも、大古山遺跡や星山遺跡など43か所の遺跡が確認されている<sup>1)</sup>。

弥生時代の遺跡については、これまで正式な発掘調査が少なかったために、希薄な地域とされてきた。しかし、1990年に旧友部町域南東部の久保塚群や向原遺跡において竪穴住居跡が確認され<sup>2)</sup>、さらに2003年には北東4.8kmに位置する三本松遺跡〈8〉において大量の土器と共に15軒の竪穴住居跡が確認され<sup>3)</sup>、当該期においても充実した集落の存在が知られるようになってきた。弥生土器の包蔵地は19か所が数えられ、各遺跡は縄文時代と同様に、両河川に面する台地の縁辺部に立地している様子がうかがえる。近年、酒沼川流域は十王台式土器や下稲吉式土器及び二軒屋式土器、樽式土器などの出土<sup>4)</sup>によって、地域間の交流をつかむ良好な地域として知られるようになってきている。

古墳時代になると、集落は台地の縁辺部に、古墳はそれに加えて、台地のやや奥まった地域にも認められるようになる。古墳群は26か所を数え、そのうち旧友部町域北東部に位置している古墳群としては、柳沢古墳群や一本松古墳群〈5〉があげられる。特に一本松古墳群に属する山王塚古墳は径50mほどの円墳で、前方部が削られた前方後円墳が本来の墳形であったとする説もある。また、大沢遺跡の北西側に位置する諏訪山古墳は全長62.4mの前方後円墳であり、これらの古墳の存在は被葬者の権力の大きさを示すものと考えられる。

一方、古墳を築造した集団の基盤となる集落域の分布は必ずしも明確ではないが、北東4.6kmに位置する小原遺跡<sup>5)</sup>〈4〉や、南東6.2kmに位置する久保塚群、新善光寺跡などからも前期の竪穴住居跡<sup>6)</sup>が確認され、徐々にではあるが資料は増加している。

奈良・平安時代の旧友部町域は、那賀郡と茨城郡の両郡にまたがっており、町域東部は那賀郡、西部は茨城

郡に編入され、宍戸地区は茨城郡石間（岩間）郷内の北縁部に位置していたと想定される。当該期の集落跡としては、当遺跡の南西約4kmにある東平遺跡<sup>7)</sup>や北平遺跡<sup>8)</sup>〈23〉、北東約5kmにある三本松遺跡などが確認されているが、調査事例を見る限り、古墳時代から継続する集落はほとんど見られず、奈良・平安時代になって新たに形成されたものが多い。

中世において、当地を支配するのは、総領家の小田氏と常陸守護職を継承しあう宍戸氏である。鎌倉時代の守護所を含め、宍戸氏の居館は特定されていないが、町内に宍戸氏と関連する寺社が多く存在することから、秋田氏居住の宍戸城跡やその東隣に立地する古館にその地を比定しても不自然ではない。本領である「小鶴荘」の荘名と名字の不一致、及び荘域に「宍戸」なる地名が全く存在しない点はよく指摘されるところであるが、14世紀前半には「宍戸荘」という呼び方が確実に存在していること<sup>9)</sup>や「宍戸」を広域地名と見る考え方も示されていること<sup>10)</sup>から、宍戸地区を居住の本拠地と見るのが妥当と思われる。

近世になると、佐竹氏の秋田移封と入れ替わるようにして秋田氏が宍戸城に入城し5万石を領したが、1645年の陸奥三春への国替えに伴い領地が幕府の直轄地に編入されると、宍戸城は破却され、武家屋敷も取り壊されてその大部分が水田となった。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1及び第1図の該当番号と同じである。

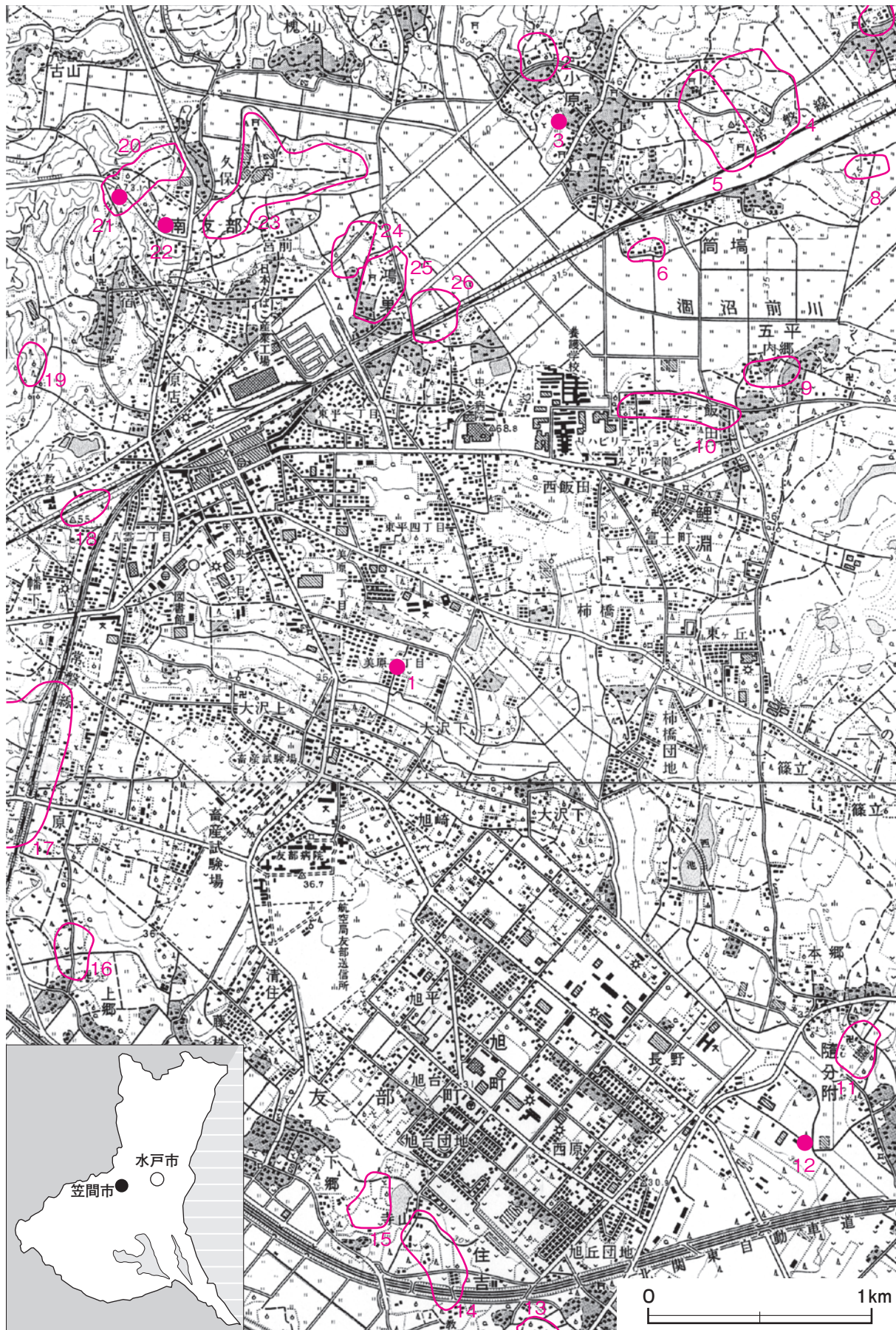
註

- 1) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 長岡正雄 仲村浩一郎「総合流通センター整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 仲丸遺跡 久保塚群 五万掘古道 向原遺跡 向原塚群前原塚 仲丸塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第162集 茨城県教育財団 2000年3月
- 3) 早川泉 板野晋鏡 伊藤俊治 東早花『三本松遺跡』友部町三本松遺跡発掘調査会 2003年3月
- 4) 近藤恒重「大戸下郷遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第216集茨城県教育財団 2004年3月
- 5) 稲田義弘「新善光寺跡・宍戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第256集 2006年3月
- 6) 服部敬史 小野真美 萩原明美 山本久「小原遺跡」大成エンジニアリング株式会社 友部町小原遺跡発掘調査会 2004年3月
- 7) 平松孝志「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 寺山遺跡 東平遺跡 坂ノ上塚群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第150集 1999年3月
- 8) 能島清光 山口憲一 高橋孝之『北平遺跡』友部町北平遺跡発掘調査会 2004年3月
- 9) 如意輪時（旧友部町上市原）の鰐口に嘉暦3年（1328年）と完（宍）戸荘の銘が記されている。
- 10) 茨城町史編さん委員会『茨城町史 通史編』茨城町 1995年2月

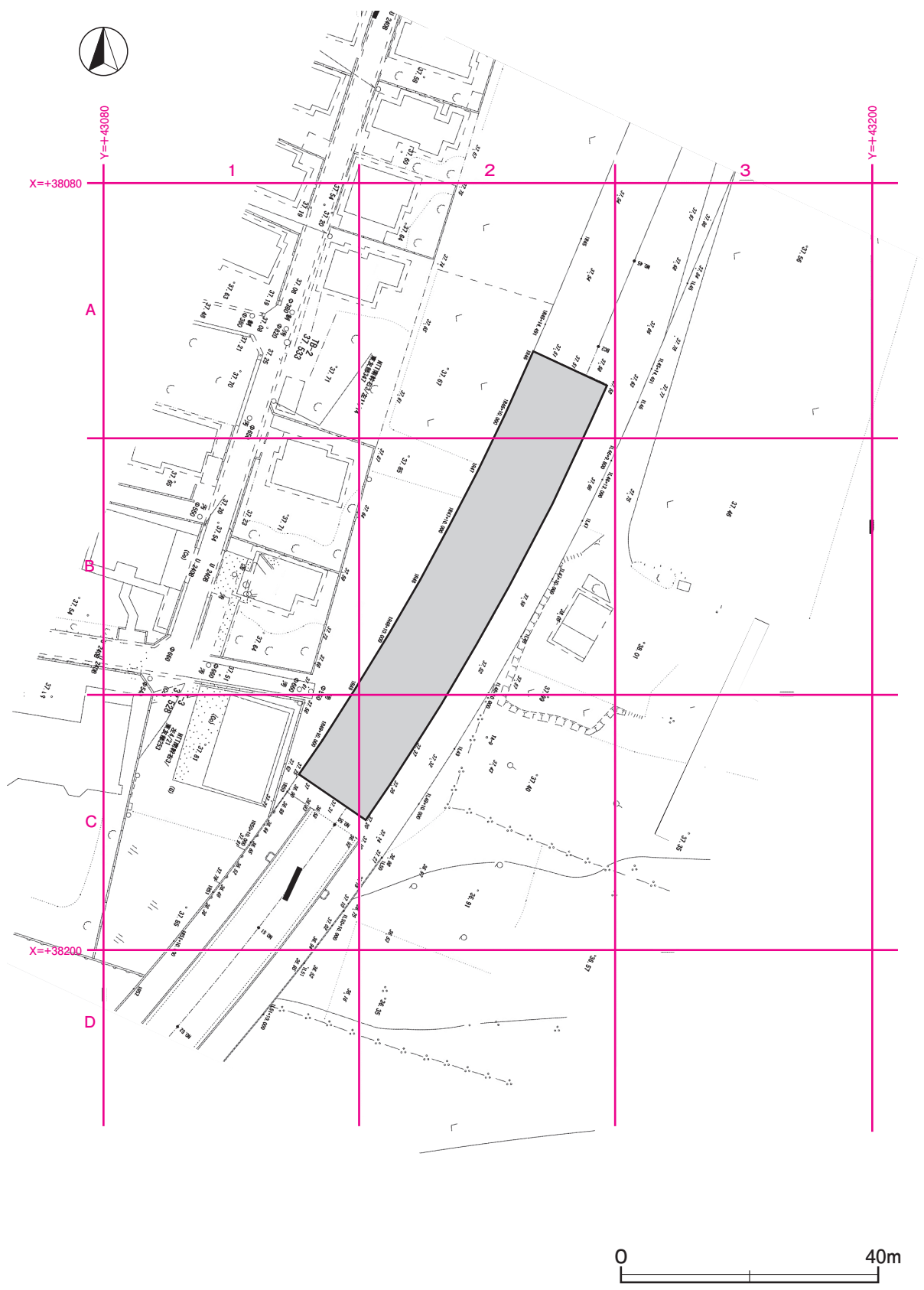
表1 大沢遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世
①	大沢遺跡			○				14	寺山遺跡	○	○		○			
2	高寺古墳群				○			15	川郷地池遺跡		○			○		
3	小原城跡						○	16	上郷遺跡		○		○		○	○
4	小原遺跡		○	○	○	○		17	橋爪遺跡		○	○				
5	一本松古墳群				○			18	二ッ塚古墳				○			
6	塚崎古墳				○			19	猿丸塚古墳群				○			
7	原坪古墳群				○			20	久保遺跡		○			○		
8	三本松遺跡			○		○		21	大塚古墳				○			○
9	五平古墳群				○		○	22	丹後塚古墳				○			○
10	五平内郷遺跡		○	○	○	○		23	北平遺跡	○	○			○		
11	随分附遺跡		○	○				24	掃部塚古墳群				○			
12	東原製鉄跡						○	25	家前遺跡		○	○	○			
13	住吉城						○	27	田端内遺跡		○	○	○			





第1図 大沢遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1「笠間」「友部」）



第2図 大沢遺跡調査区設定図（遺跡測量図から作成）

# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査の概要

大沢遺跡は、笠間市東部に位置し、涸沼川の支流である枝折川左岸の標高 36 m の台地の緩斜面地に立地している。調査面積は 960㎡で、調査前の現況は宅地と畑地である。

今回の調査で、竪穴住居跡 2 軒（弥生時代）、溝跡 1 条（時期不明）、土坑 5 基（時期不明 5）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20cm）に 1 箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺・手捏土器）、土師器（甕）、須恵器（甕）、土製品（紡錘車）、石器（石鏃）などである。

## 第2節 基本層序

調査区の北部（A 2h8 区）にテストピットを設定し、地表面から 2 m ほど掘り下げて基本層序の観察を行った（第3図）。土層は 7 層に分層でき、観察結果は以下のとおりである。

第 1 層は、明褐色を呈するソフトロームへの漸移層である。粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は 7 ～ 14cm である。

第 2 層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は 10 ～ 31cm である。

第 3 層は、褐色を呈するハードロームへの漸移層である。粘性・締まりともに強く、層厚は 8 ～ 16cm である。

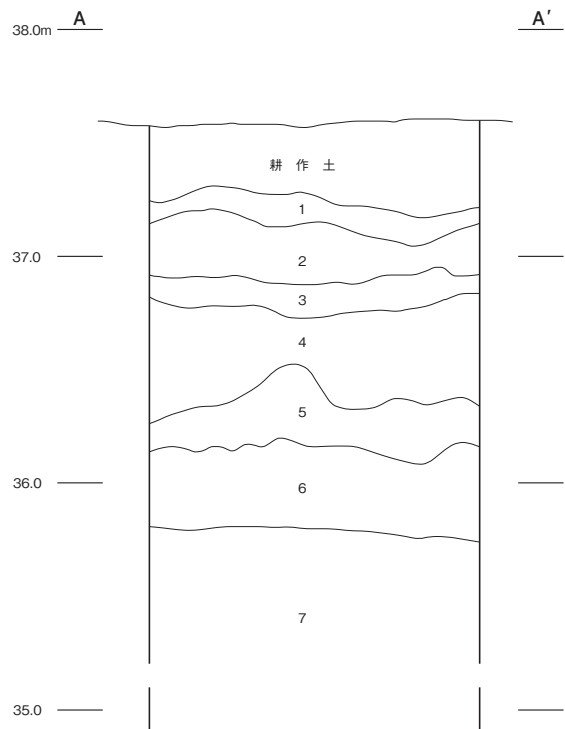
第 4 層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は 20 ～ 58cm である。

第 5 層は、にぶい褐色を呈するハードローム層である。AT パミスとみられるガラス質粒子を微量、鹿沼パミスを少量含み、粘性は普通で、締まりは強い。層厚は 11 ～ 34cm である。目視では分層できないが、本層中に AT 層が存在するものと考えられる。

第 6 層は、橙色を呈する鹿沼パミス層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は 35cm ～ 42cm である。

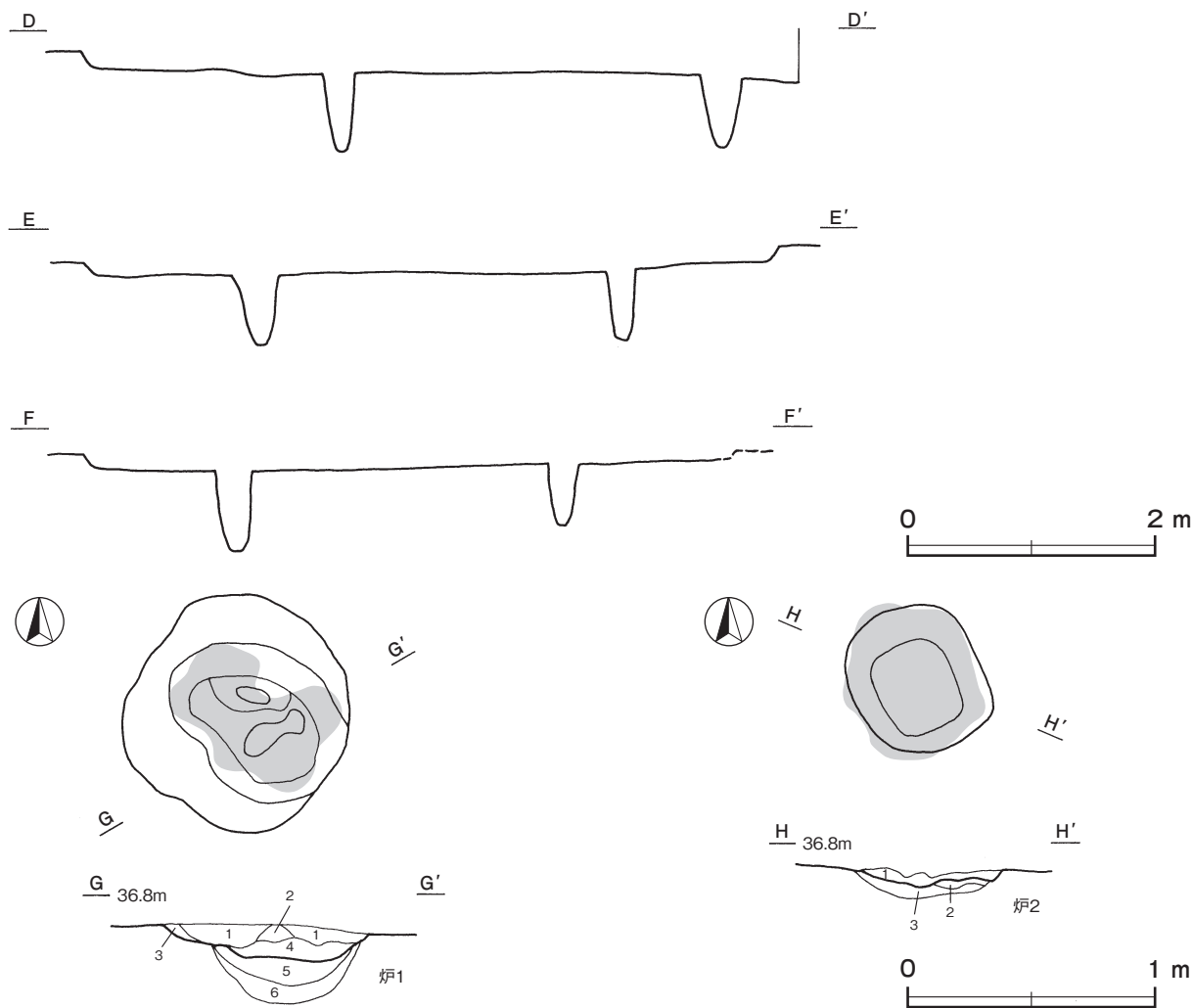
第 7 層は粘土層で、層厚は 90cm まで確認したが、下層は未掘のため不明である。

なお、遺構は第 1 層から確認できた。



第3図 基本土層図





第5図 第1号住居跡実測図(2)

炉 2か所。炉1は中央部に付設されている地床炉である。長径100cm、短径70cmの楕円形で、床面から55cm掘り込まれている。炉2は北西コーナー寄りに付設されている地床炉である。長径65cm、短径60cmの円形で、床面から23cm掘り込まれている。

炉1土層解説

- |        |                          |      |                       |
|--------|--------------------------|------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量   | 5 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色  | 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量  | 6 褐色 | ロームブロック多量             |
| 3 黒褐色  | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量    |      |                       |
| 4 赤褐色  | 焼土ブロック多量、ロームブロック少量、炭化物微量 |      |                       |

炉2土層解説

- |          |                           |       |                       |
|----------|---------------------------|-------|-----------------------|
| 1 赤褐色    | 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子少量   | 3 明褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい赤褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |       |                       |

ピット 6か所。P1～P4は深さ50～72cmで、配置から支柱穴である。P5は深さ58cmで、位置や硬化面の広がりから出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ44cmで、性格不明である。

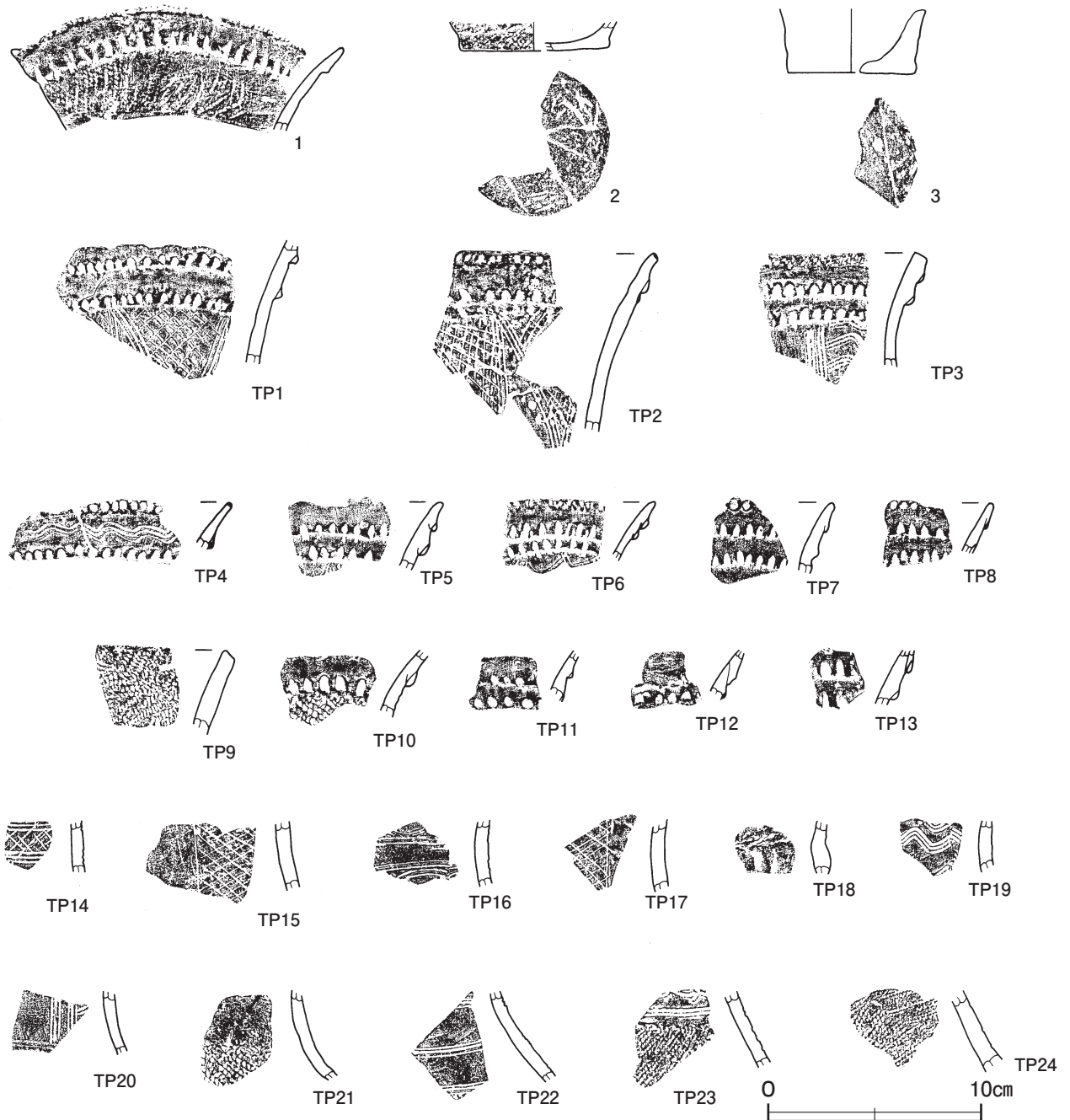
覆土 4層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

土層解説

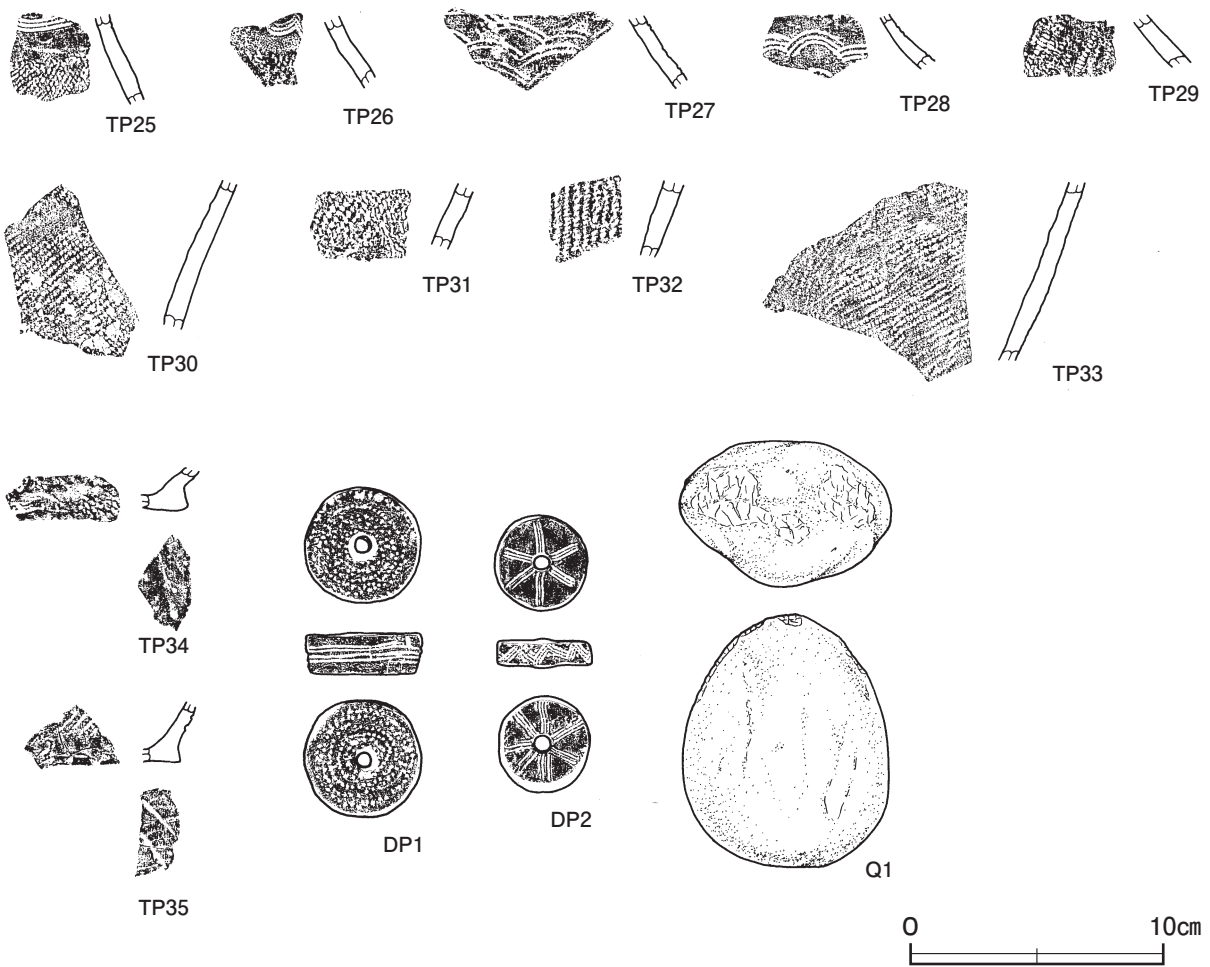
- |        |                  |       |           |
|--------|------------------|-------|-----------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子微量          | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 褐色  | ロームブロック中量 |

**遺物出土状況** 弥生土器片 96 点 (壺), 土製品 2 点 (紡錘車), 石器 1 点 (敲石), 剥片 20 点 (石英片 19, チャート 1) が出土している。また, 流れ込んだ縄文土器片 1 点 (深鉢) も出土している。TP 2 は中央部, TP 5 は北部, TP23 は東部, TP15・17 は炉 1 付近, DP1 は西壁際, DP2, Q 1 は北西部のそれぞれ床面, 1, 2, TP29 は炉 1, TP18 は炉 2 の火床部から, 3, TP13 は東部の覆土下層, TP 1 は北西部の覆土中層, TP 3・33 は北部の覆土上層から出土している。TP16 は P 1, TP26 は P 2, TP21 は P 6, TP31 は炉 1 の覆土中, TP20, 35 は床下の埋土中からそれぞれ出土している。その他の TP は, 覆土中からの出土である。

**所見** 時期は, 出土土器から弥生時代後期後半に比定できる。炉 1・2 の周辺と火床部から石英の破片が出土しており, 火を使用して石器加工を行っていた可能性が考えられる。



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表(第6・7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	15.3	(3.9)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部原体押圧 口縁部附加条一種縄文施文 下端刺突	炉1火床部	10% PL4
2	弥生土器	壺	-	(1.4)	[7.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部附加条一種縄文施文 底部木葉痕	炉1火床部	5% PL4
3	弥生土器	壺	-	(3.0)	[6.0]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部木葉痕	覆土下層	5% PL4

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	下端刺突 頸部櫛歯状工具(3本)による鋸歯文を施した後上部区画に斜格子文を施文	覆土中層	PL4
TP2	弥生土器	壺	長石・石英	橙	口唇部原体押圧 下端刺突 頸部櫛歯状工具(3本)による山形文を施した後斜格子文を施文	床面	PL4
TP3	弥生土器	壺	長石・石英・針状鉱物	黒褐	口唇部原体押圧 下端刺突 頸部櫛歯状工具(6本)による縦区画に波状文充填	覆土上層	PL4
TP4	弥生土器	壺	長石・石英	橙	口唇部原体押圧 櫛歯状工具(3本)による波状文 下端刺突	覆土中	PL5
TP5	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	口唇部原体押圧 下端刺突 頸部櫛歯状工具(3本)による櫛描文	床面	PL5
TP6	弥生土器	壺	長石・石英・針状鉱物	にぶい褐 黒褐	口唇部原体押圧 下端刺突 頸部連弧文	覆土中	PL5
TP7	弥生土器	壺	長石・雲母	灰褐	口唇部原体押圧 下端刺突	覆土中	PL5
TP8	弥生土器	壺	長石・石英	黒褐	口唇部原体押圧 下端刺突	覆土中	PL5
TP9	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	附加条一種縄文施文	覆土中	PL5
TP10	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	暗褐	附加条一種縄文施文 下端刺突	覆土中	PL5

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徵ほか	出土位置	備考
TP11	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	口縁部下端刺突	覆土中	PL5
TP12	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	口縁部下端刺突	覆土中	PL5
TP13	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	附加条二種縄文施文	覆土下層	PL5
TP14	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい橙	櫛歯状工具（3本）による横走文区角内に斜格子文	覆土中	PL5
TP15	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	頸部斜格子文	床面	PL5
TP16	弥生土器	壺	長石・石英	黒褐	半裁竹管状工具による横走文と連弧文	P 1 覆土中	PL5
TP17	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	頸部斜格子文	床面	PL5
TP18	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	明赤褐	附加条一種縄文施文	炉 2 火床部	PL5
TP19	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	櫛歯状工具（3本）による波状文	覆土中	PL5
TP20	弥生土器	壺	長石・石英	黒褐	櫛歯状工具（3本）による縦位櫛歯文	床下	PL5
TP21	弥生土器	壺	長石・石英・赤色粒子	灰褐	附加条一種縄文施文	P 6 覆土中	PL5
TP22	弥生土器	壺	長石・雲母	灰褐	櫛歯状工具（3本）による横走文	覆土中	PL5
TP23	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	灰褐	櫛歯状工具（3本）による横走文 胴部附加条一種縄文施文	床面	PL5
TP24	弥生土器	壺	長石・石英	灰黄褐	附加条一種縄文施文 羽状構成	覆土中	PL5
TP25	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	櫛歯状工具（3本）による横位櫛歯文 胴部附加条一種縄文施文	覆土中	PL5
TP26	弥生土器	壺	長石・石英	褐	櫛歯状工具（3本）による波状文	P 2 覆土中	PL5
TP27	弥生土器	壺	長石・石英	橙	頸部 櫛歯連弧文	覆土中	PL5
TP28	弥生土器	壺	長石・雲母	褐	櫛歯状工具（3本）による連弧文	覆土中	
TP29	弥生土器	壺	長石・石英	灰黄褐	附加条一種縄文施文	炉 1 火床部	
TP30	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい橙	附加条一種縄文施文	覆土中	
TP31	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	附加条一種縄文施文	炉 1 覆土中	
TP32	弥生土器	壺	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	附加条一種縄文施文	覆土中	
TP33	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい橙	附加条一種縄文施文	覆土上層	
TP34	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい橙	底部木葉痕	覆土中	
TP35	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい褐	附加条一種縄文施文 底部木葉痕	床下	

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP1	紡錘車	4.6	0.6	1.7	44.0	長石・石英	上・下面刺突文 側面4条の櫛歯文	床面	PL4
DP2	紡錘車	3.8	1.3	0.7	24.0	長石・石英	上・下面・側面4条の櫛歯文	床面	PL4

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	敲石	10.0	8.3	5.8	684	花崗岩	敲打痕1面	床面	PL4

## 第2号住居跡（第8・9図）

**位置** 調査区南東部のB 2j3区，標高37.0mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸3.62m，短軸2.81mの隅丸長方形で，長軸方向はN-69°-Eである。壁高は12cmで，外傾して立ち上がっている。

**床** ほほ平坦な貼床で，壁際を除いて踏み固められている。

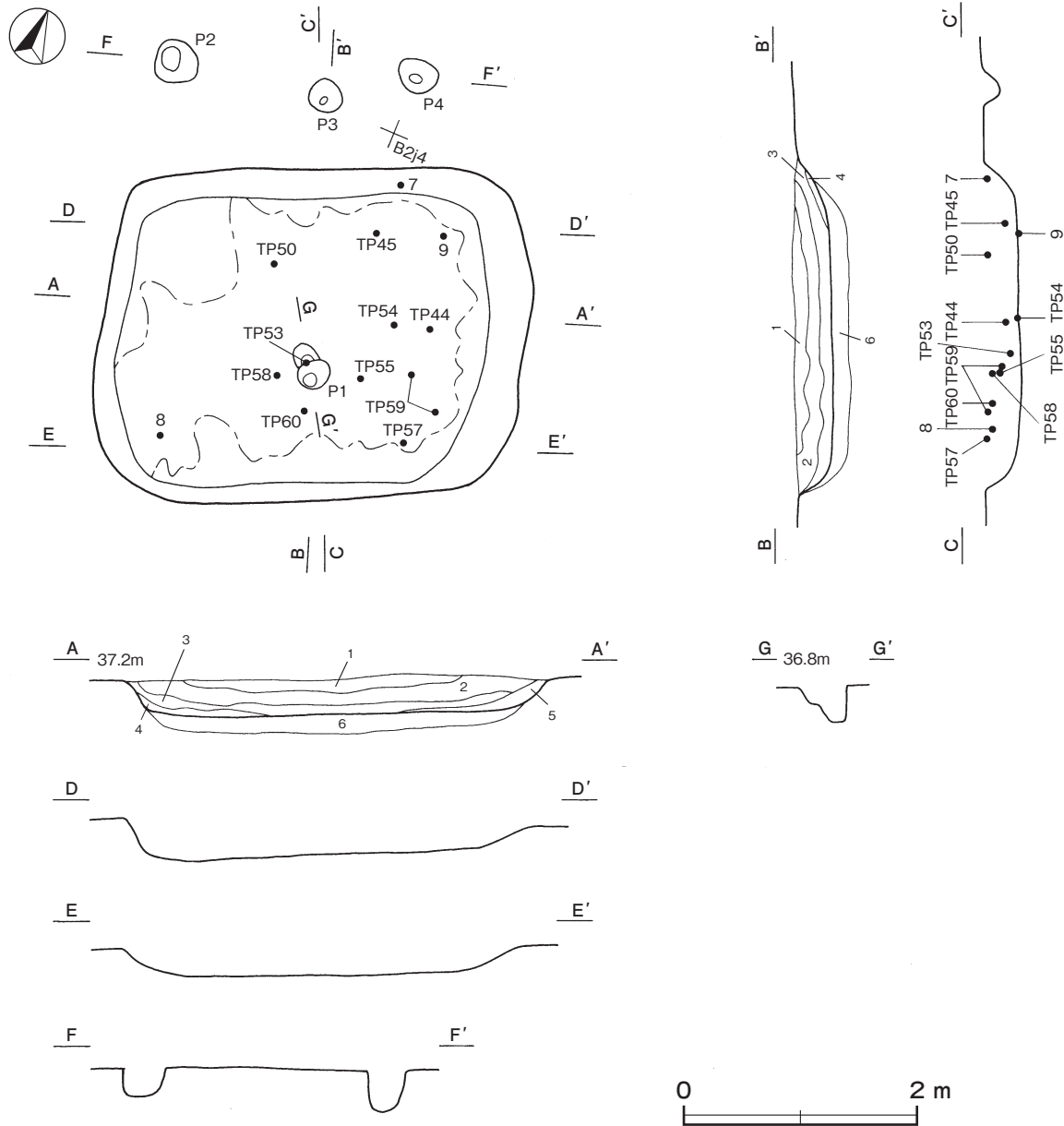
**ピット** 4か所。P 1は深さ30cmで，貼床の下から確認したものであり，性格は不明である。P 2は深さ26cm，P 3は深さ15cm，P 4は深さ36cmで，位置から壁外柱穴の可能性もある。

**覆土** 5層に分層できる。レンズ状に堆積していることから自然堆積である。第6層は貼床の構築土である。



土層解説

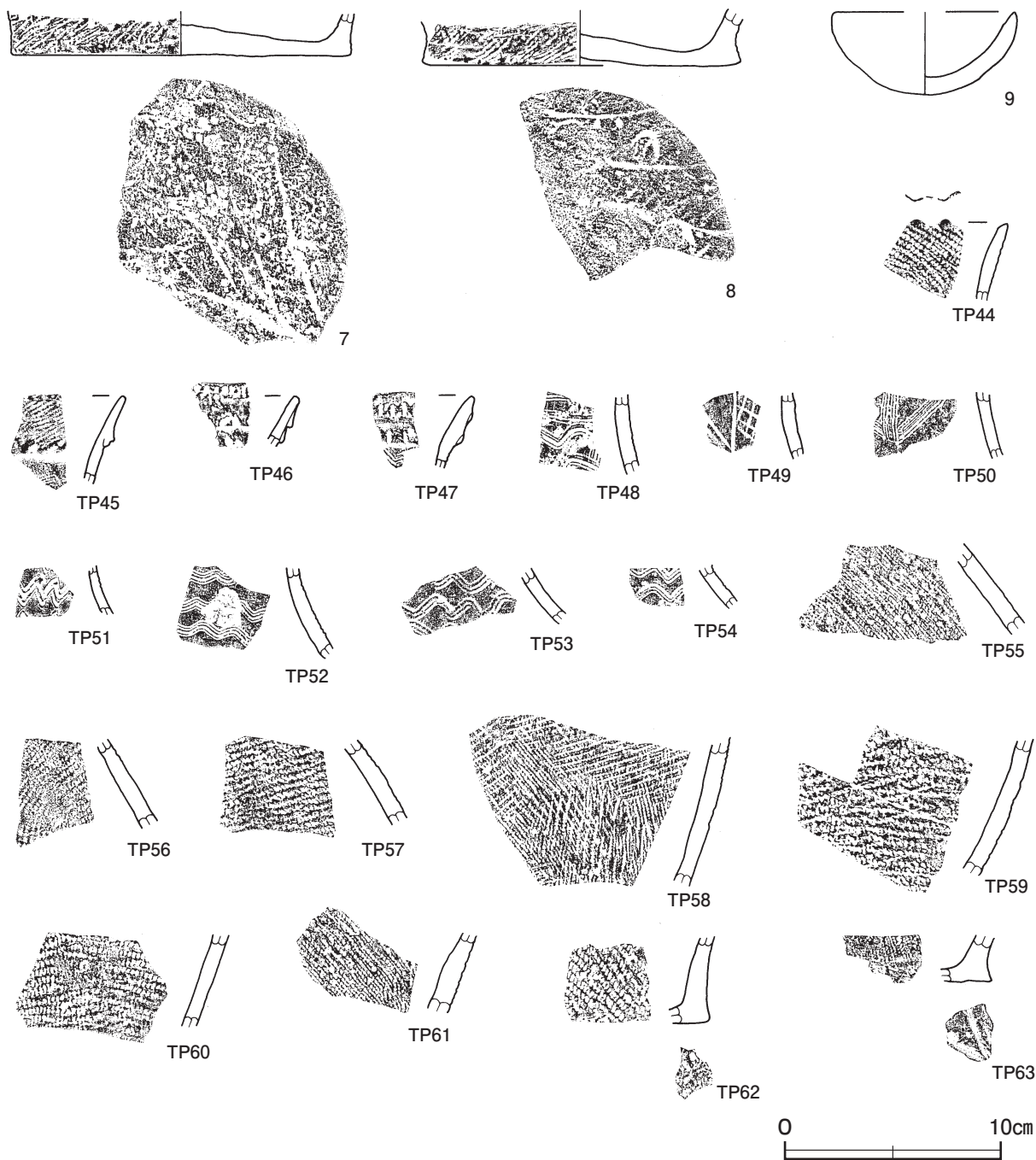
- |       |                           |       |                   |
|-------|---------------------------|-------|-------------------|
| 1 黒色  | 炭化粒子少量, ローム粒子極微量          | 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量            | 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量  |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量, 焼土粒子極微量 | 6 褐色  | ローム粒子多量           |



第8図 第2号住居跡実測図

**遺物出土状況** 弥生土器片 69 点 (壺), 手捏土器 1 点が出土している。また, 流れ込んだ石器 1 点 (石鏃) も出土している。9 は北コーナー部付近の床面から正位の状態, TP54 は中央部東寄りの床面, TP44・45・53 は覆土下層, 8 は南コーナー部, TP55 は中央部の覆土中層, 7 は北壁際, TP50 は北部, TP60 は南部, TP58 は中央部のそれぞれ覆土上層から出土している。その他の TP は覆土上層および覆土中からの出土である。

**所見** 時期は, 出土土器から弥生時代後期後半に比定できる。



第9図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
7	弥生土器	壺	-	(2.0)	[16.0]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種縄文施文 底部木葉痕	覆土上層	PL4
8	弥生土器	壺	-	(2.6)	[14.8]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種縄文施文 底部木葉痕	覆土中層	PL4
9	手捏土器	手捏	[8.4]	3.8	-	長石・石英	にぶい橙	普通	外・内面指頭圧痕	床面	PL4

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徵ほか	出土位置	備考
TP44	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	口唇部波状口縁 胴部附加条一種縄文施文	覆土下層	PL5
TP45	弥生土器	壺	長石・石英	灰褐	附加条一種縄文施文 下端刺突	覆土下層	PL5
TP46	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	口唇部原体押圧 下端刺突	覆土上層	PL5
TP47	弥生土器	壺	長石	灰黄褐	口唇部原体押圧 下端刺突	覆土下層	PL5
TP48	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	櫛歯状工具（4本）による波状文	覆土上層	PL5
TP49	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	頸部斜格子文	覆土上層	PL5
TP50	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい橙	櫛歯状工具（6本）による櫛歯文	覆土上層	PL5
TP51	弥生土器	壺	長石・石英	黒褐	櫛歯状工具（3本）による波状文	覆土上層	PL5
TP52	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい橙	櫛歯状工具（4本）による波状文	覆土中	PL5
TP53	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	櫛歯状工具（3本）による波状文	覆土下層	PL5
TP54	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい褐	櫛歯状工具（3本）による波状文	床面	PL5
TP55	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄褐	附加条一種縄文施文	覆土上層	PL5
TP56	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	灰黄褐	附加条一種縄文施文	覆土上層	
TP57	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい橙	附加条一種縄文施文	覆土上層	
TP58	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい橙	附加条一種縄文施文 羽状構成	覆土上層	
TP59	弥生土器	壺	長石・石英・雲母・赤色 粒子	にぶい橙	附加条一種縄文施文	覆土中～上層	
TP60	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	附加条一種縄文施文	覆土上層	
TP61	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	附加条一種縄文施文	覆土上層	
TP62	弥生土器	壺	長石・石英	黒褐	附加条一種縄文施文 底部木葉痕	覆土上層	
TP63	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	附加条一種縄文施文 底部木葉痕	覆土上層	

表2 弥生時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)	
								支柱穴	出入口	ピット	貯蔵穴					
1	C2d1	N-70°-W	長方形	(6.90) × 5.57	10	平坦	-	4	1	1	2	-	自然	壺	後期	
2	B2j3	N-69°-E	長方形	3.62 × 2.81	12	平坦	-	-	-	4	-	-	自然	壺	後期	

## 2 その他の遺構と遺物

伴う遺物が出土していないことなどから、時期が明らかにできない溝跡1条、土坑5基を確認した。以下、遺構の特徴について記述する。

### (1) 溝跡

#### 第2号溝跡（第10・13図）

**位置** 調査区北部のB 2a6区からB 2a9区にかけて、標高37.0mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 西・東側が調査区域外へ延びているため、長さ9.84mしか確認できなかった。西方向（N-76°-W）に直線的に延びている。上幅0.88～1.18m、下幅0.20～0.37m、深さ32cmである。断面形はU字形で、壁は緩斜して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況である。ロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

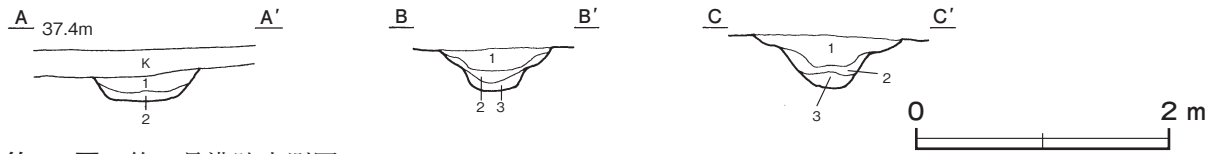
#### 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量  
2 黒褐色 ロームブロック中量

3 暗褐色 ロームブロック多量

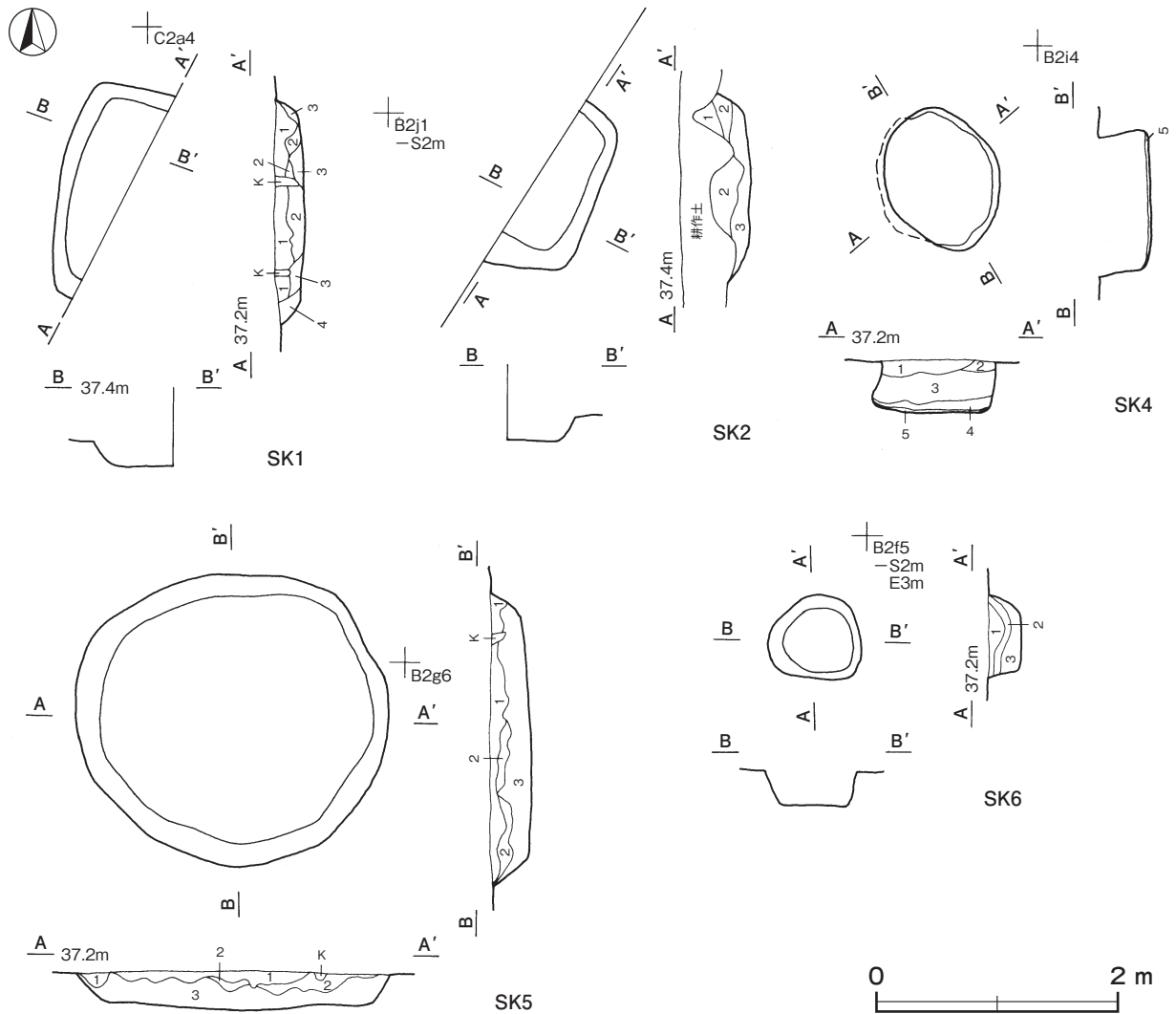
遺物出土状況 混入した縄文土器片1点（深鉢）が出土している。

所見 時期は、不明である。



第10図 第2号溝跡実測図

(2) 土坑 (第11図)



第11図 その他の土坑実測図

土層解説

第1号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 黒色土ブロック微量
- 2 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子極微量
- 3 褐 色 ローム粒子多量, 黒色土ブロック極微量
- 4 褐 色 ロームブロック少量

第5号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子極微量
- 2 褐 色 ロームブロック微量, 炭化粒子極微量
- 3 褐 色 ロームブロック・黒色土ブロック極微量

第2号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック中量, 炭化物微量, 焼土粒子極微量
- 3 褐 色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量

第6号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 3 褐 色 ロームブロック少量, 黒色粒子微量

第4号土坑土層解説

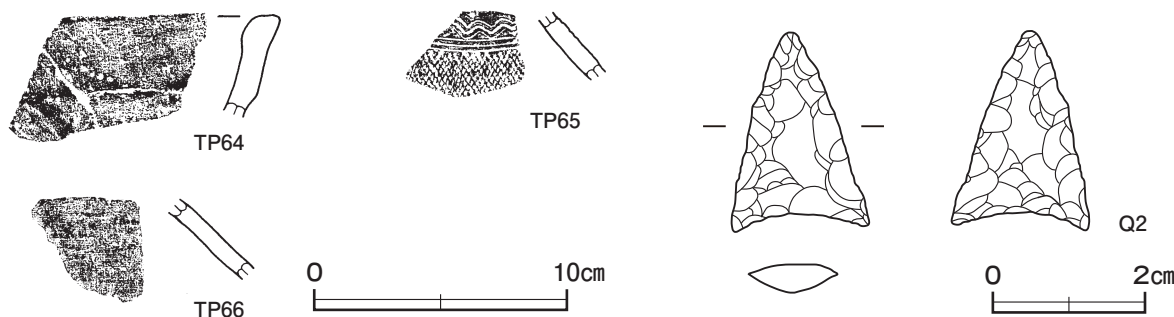
- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック多量, 焼土ブロック極微量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック多量, 炭化材微量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック中量
- 5 灰 白 色 骨粉・灰中量

表3 その他の土坑一覧表 (第11図)

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係 (古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	C2a3	N-13° -E	[長方形]	1.82 × (0.68)	22	平坦	緩斜	人為	-	
2	B2a1	N-32° -E	[長方形]	1.55 × (0.54)	22	平坦	緩斜	人為	-	
4	B2i3	N-46° -W	楕円形	1.20 × 1.04	42	平坦	内傾・外傾	人為	-	
5	B2g5	-	円形	2.62 × 2.44	33	平坦	緩斜	自然	-	
6	B2f5	-	円形	0.77 × 0.75	28	平坦	外傾	自然	-	

(3) 遺構外出土遺物 (第12図)

遺構に伴わない主な遺物について、特徴的なものを実測図及び観察表で掲載する。



第12図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第12図)

番号	種 別	器種	胎 土	色 調	手 法・文 様 の 特 徴 ほか	出土位置	備 考
TP64	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	胴部外面隆帯貼付け	表土	
TP65	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄褐	櫛歯状工具(3本)による波状文・横走文 胴部附加条一種縄文施文	表土	
TP66	須恵器	甕	長石	黄灰	体部外面並行叩き	表土	

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q2	石鏃	2.6	1.7	0.3	2.0	チャート	両面押圧剥離	表土	PL4

## 第4節 ま と め

今回の調査で、弥生時代の住居跡2軒、時期不明の溝跡1条、土坑5基を確認した。ここでは、弥生時代の住居跡と出土土器について若干の考察をする。

### 1 弥生時代後期後半の住居跡について

当遺跡周辺における同時期の遺跡は、新善光寺・久保塚群・小原遺跡・三本松遺跡・向原遺跡が挙げられる。これらの遺跡で確認された竪穴住居跡の総数は、27軒である（表4参照）。一遺跡における住居跡は、三本松遺跡が15軒と最多で、その内13軒が谷津に向かって緩傾斜する台地の縁辺部に沿って並んでいる。その他の遺跡では、調査面積が狭く、2・3軒程度が確認されている状況である。住居跡の特徴を見ると、平面形は方形や長方形があるものの、おおむね隅丸長方形が主流であり、この時期の基本的な住居形態と考えられる。小原遺跡の報告書では「主軸方向がN-30°~70°-Wのものが多数で、床面積については20㎡前後と25~30㎡前後及び35㎡以上の3群に大別できる」としており、大小規模の住居で集落が構成されていることがわかる。

また、住居内施設の炉は地床炉がほとんどで、涸沼川下流域の住居跡の炉は炉石を伴っているのに対し、涸

表4 各遺跡での住居一覧表

遺跡名	住居番号	床面積	主軸方向	平面形	備考
大沢	1	(38.64)	N-70°-W	長方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	2	10.08	N-69°-W	隅丸長方形	なし
新善光寺	7	(18.91)	N-75°-W	長方形?	炉 楕円形 炉石なし
〃	9 A	(37.80)	N-0°	-	炉 楕円形 炉石なし
〃	9 B	(30.50)	N-0°	-	炉 楕円形 炉石なし
久保塚群	2	37.40	N-22°-W	隅丸方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	3	17.22	N-83°-E	隅丸方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	6	12.58	N-59°-W	隅丸長方形	炉 円・楕円形 炉石なし
小原	2	(17.50)	N-60°-W	隅丸方形?	炉 楕円形? 炉石なし
〃	4	(11.88)	N-30°-W	隅丸方形?	不明
〃	5	(18.24)	N-53°-W	隅丸長方形	炉 楕円形 炉石なし
三本松	45	19.50	N-60°-W	隅丸長方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	5	23.93	N-50°-W	隅丸長方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	66	(24.00)	N-60°-W	-	炉 楕円形 炉石なし
〃	28	24.36	N-40°-W	隅丸長方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	33	26.55	N-70°-W	隅丸長方形	不明
〃	74	27.60	N-70°-W	長方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	86	28.80	N-30°-W	長方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	62	29.00	N-50°-W	長方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	79	30.25	N-50°-W	方形	不明
〃	54	34.17	N-30°-E	長方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	77	37.12	N-55°-E	長方形	炉 楕円形 炉石なし
〃	44	39.75	N-65°-W	隅丸長方形	不明
〃	42	(10.25)	N-65°-W	-	不明
〃	78	(6.29)	N-50°-W	-	不明
〃	80	(10.56)	N-60°-W	-	不明
向原	11	(14.08)	N-25°-E	隅丸長方形	炉 楕円形 炉石なし
-	計27軒	23.59	-	-	-

※ ( ) は確認できた範囲での床面積

沼前川・枝折川流域のものは炉石をもたないのが特徴である。

上記の特徴を当遺跡の住居跡に当てはめると、主軸方向・平面形・炉石の有無についても涸沼前川・枝折川流域の住居形態と同一であることがわかる。しかし、当遺跡の第2号住居跡については、住居内に柱穴が確認できず、炉石が確認できなかったことから、倉庫的な役割の建物であった可能性が考えられる。

## 2 出土土器について

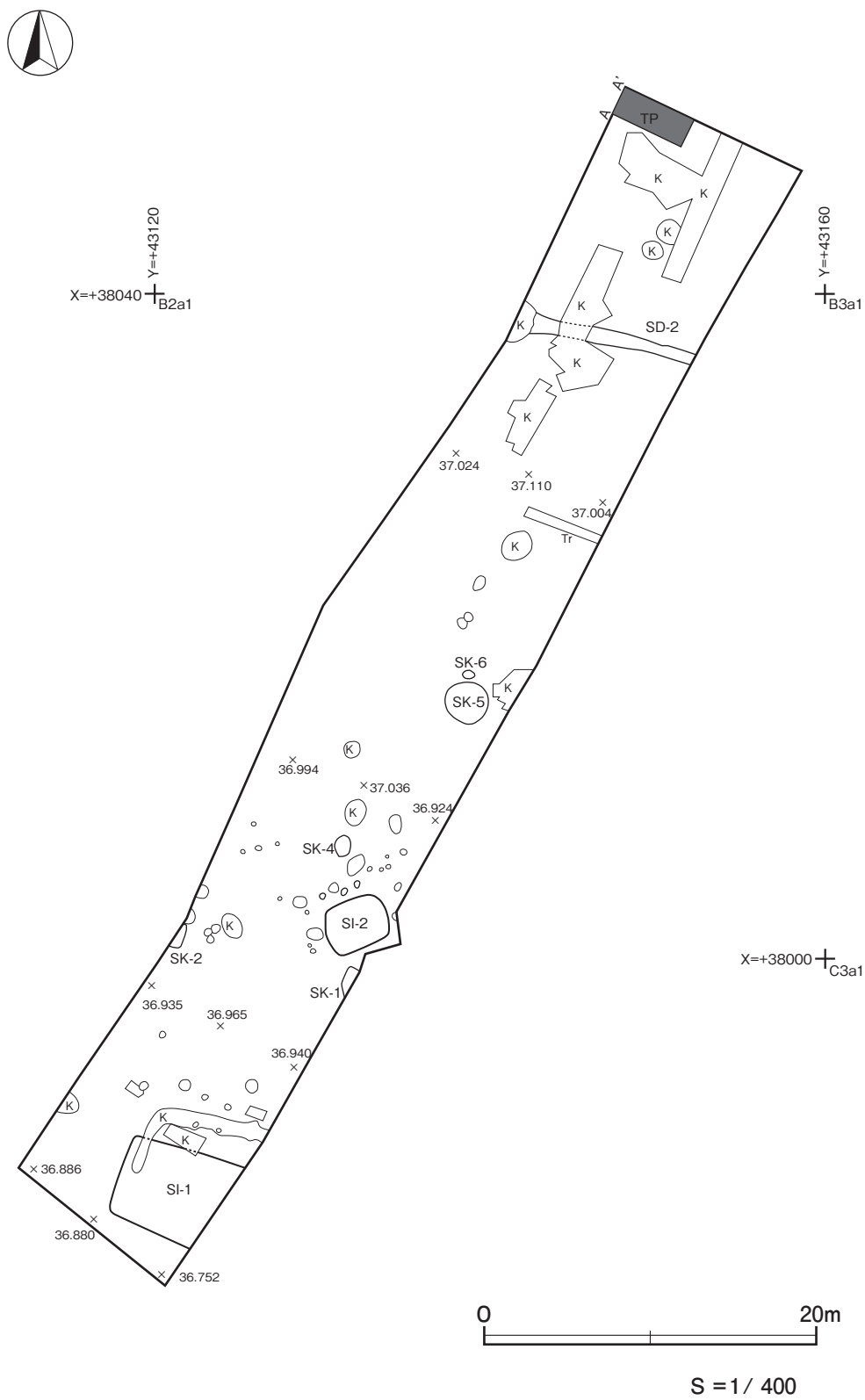
出土している土器はそのほとんどが小破片で、明確に全容が分かるものはないが、「二軒屋式土器」と「十王台式土器」の共伴が認められる。三本松遺跡では「十王台式土器」が、新善光寺・小原遺跡・久保塚群では「二軒屋式土器」と「十王台式土器」が共伴している。また、笠間市の分布調査においても、後久保遺跡と大淵宮前遺跡から「二軒屋式土器」と「十王台式土器」が採取されている。

これらのことから、当遺跡を含めた涸沼前川・枝折川流域における土器は「二軒屋式土器」を主体としながら、客体として「十王台式土器」が共伴していることが特徴であり、当遺跡で出土している土器も「二軒屋式土器」と「十王台式土器」であることから、当地域が二つの土器文化圏の接点に位置していることを意味しているものと考えられる。

最後に、今後の調査研究が進み弥生時代の調査事例が更に増加し、炉石の有無や出土土器から小文化圏の範囲などが判明してくることを期待したい。

## 参考文献

- ・稲田義弘 「新善光寺跡・宍戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第256集 2006年3月
- ・長岡正雄 仲村浩一郎 「総合流通センター整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 仲丸遺跡 久保塚群 五万掘古道 向原遺跡 向原塚群前原塚 仲丸塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第162集 2000年3月
- ・吉田寿 小宮山友康 「小原遺跡」『県営畑地帯総合整備事業（一般型）小原地区（北区）平成16年度埋蔵文化財調査報告』友部町小原遺跡発掘調査会 大成エンジニアリング株式会社 2005年3月
- ・早川泉 板野晋鏡 伊藤俊治 東早花 『三本松遺跡』友部町三本松遺跡発掘調査会 2003年3月
- ・西野元 山田康弘 桃崎祐輔 白根義久 「笠間市遺跡分布調査報告書」『笠間市資料第5集』笠間市史編さん委員会 1992年3月



第 13 図 大沢遺跡全体図



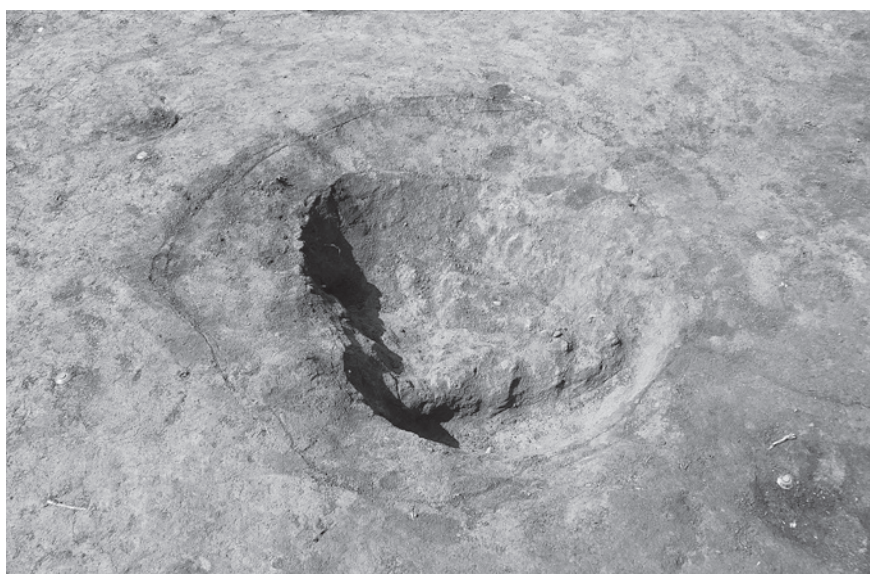
写 真 图 版



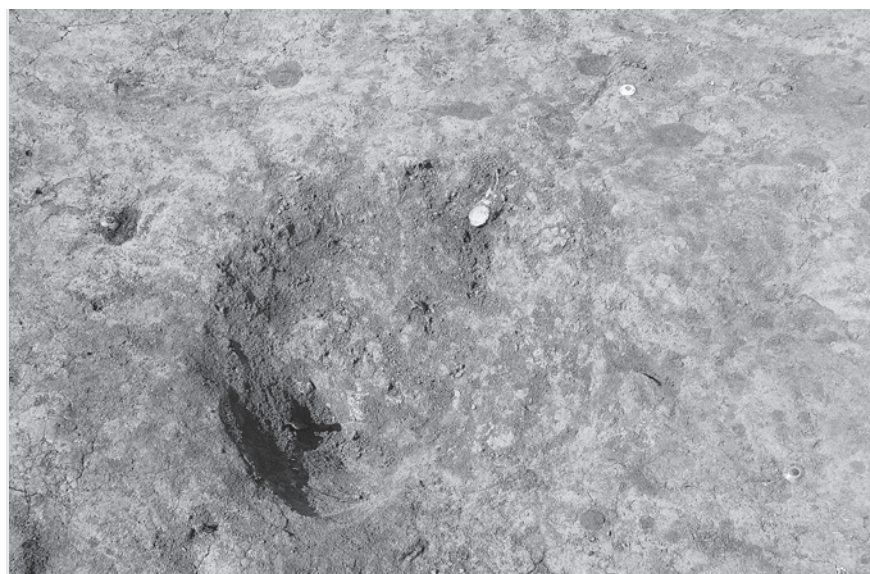
第 1 号住居跡  
完 掘 状 況



第 1 号住居跡  
炉 1 完 掘 状 況



第 1 号住居跡  
炉 2 完 掘 状 況



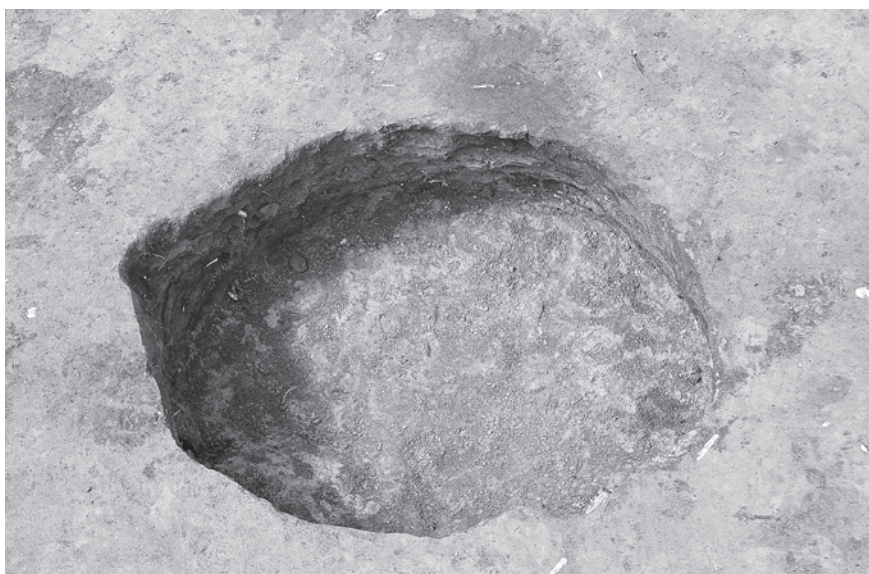
PL2



第 2 号 住 居 跡  
遺 物 出 土 状 況



第 2 号 住 居 跡  
完 掘 状 況

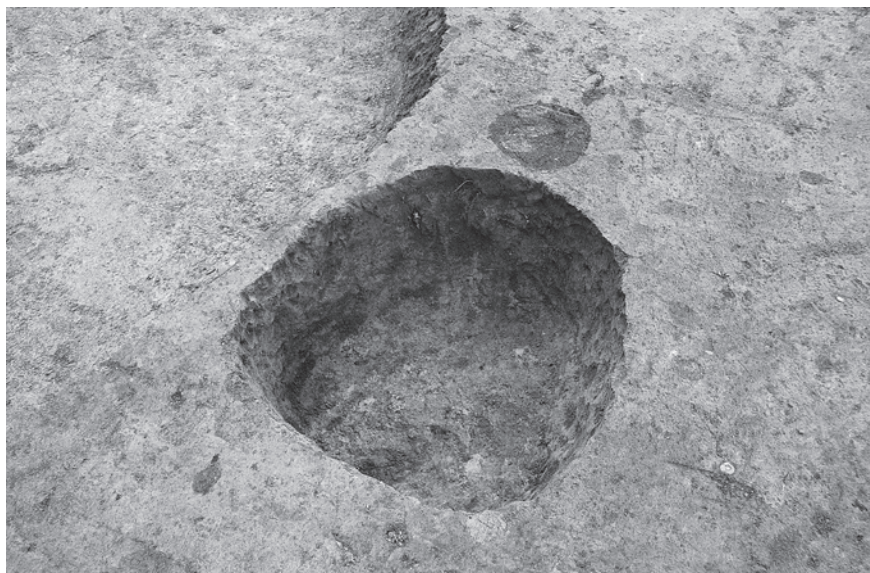


第 4 号 土 坑  
完 掘 状 況

第 5 号 土 坑  
完 掘 状 况



第 6 号 土 坑  
完 掘 状 况



第 2 号 溝 跡  
完 掘 状 况



PL4



SI 1-1



SI 2-7



SI 1-2



SI 2-8



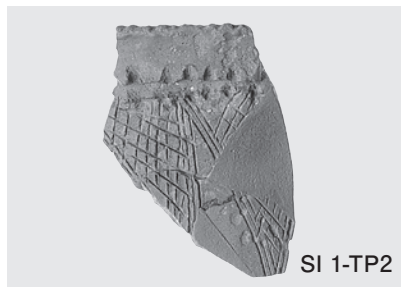
SI 1-3



SI 2-9



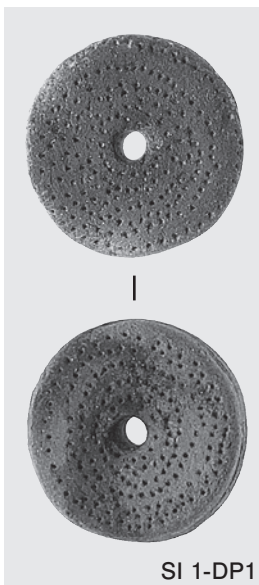
SI 1-TP1



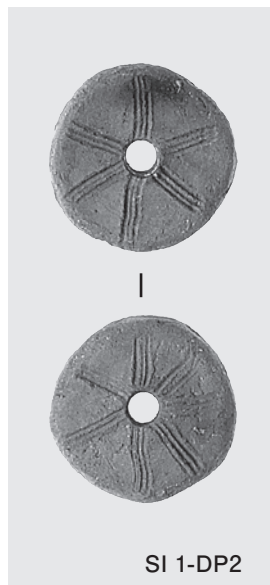
SI 1-TP2



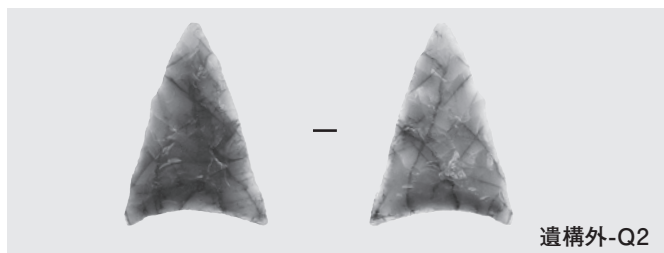
SI 1-TP3



SI 1-DP1



SI 1-DP2

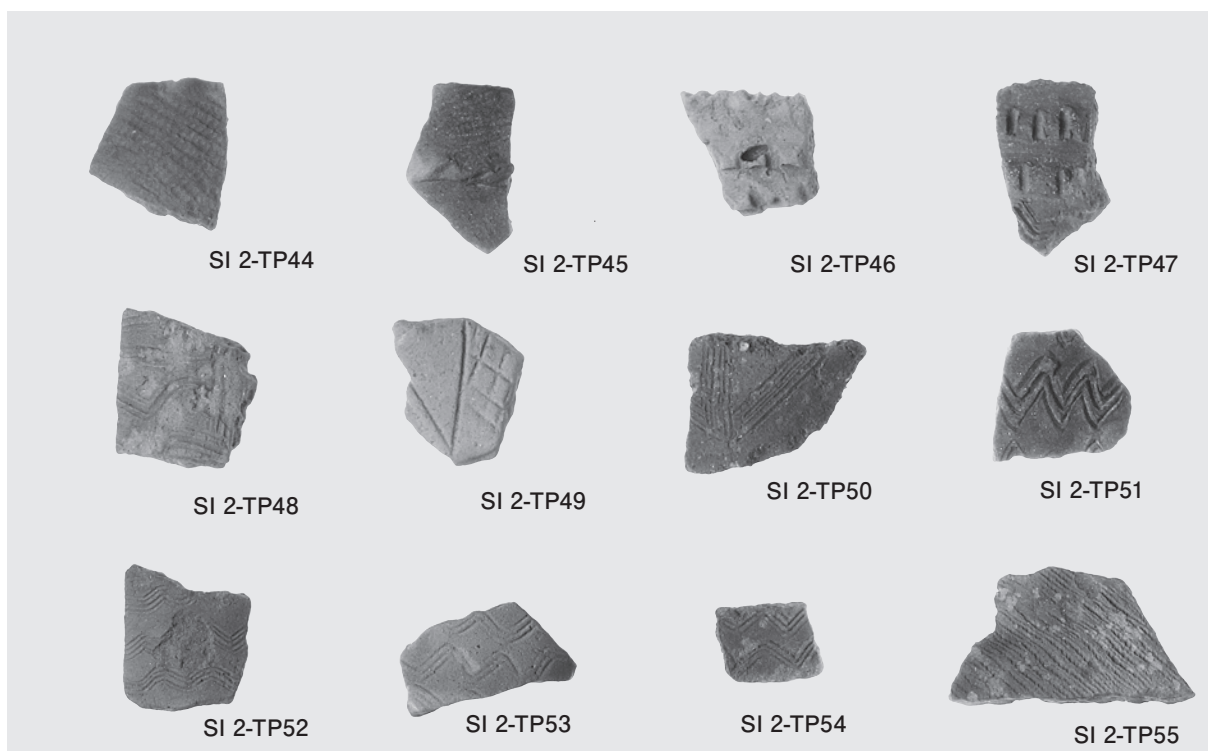
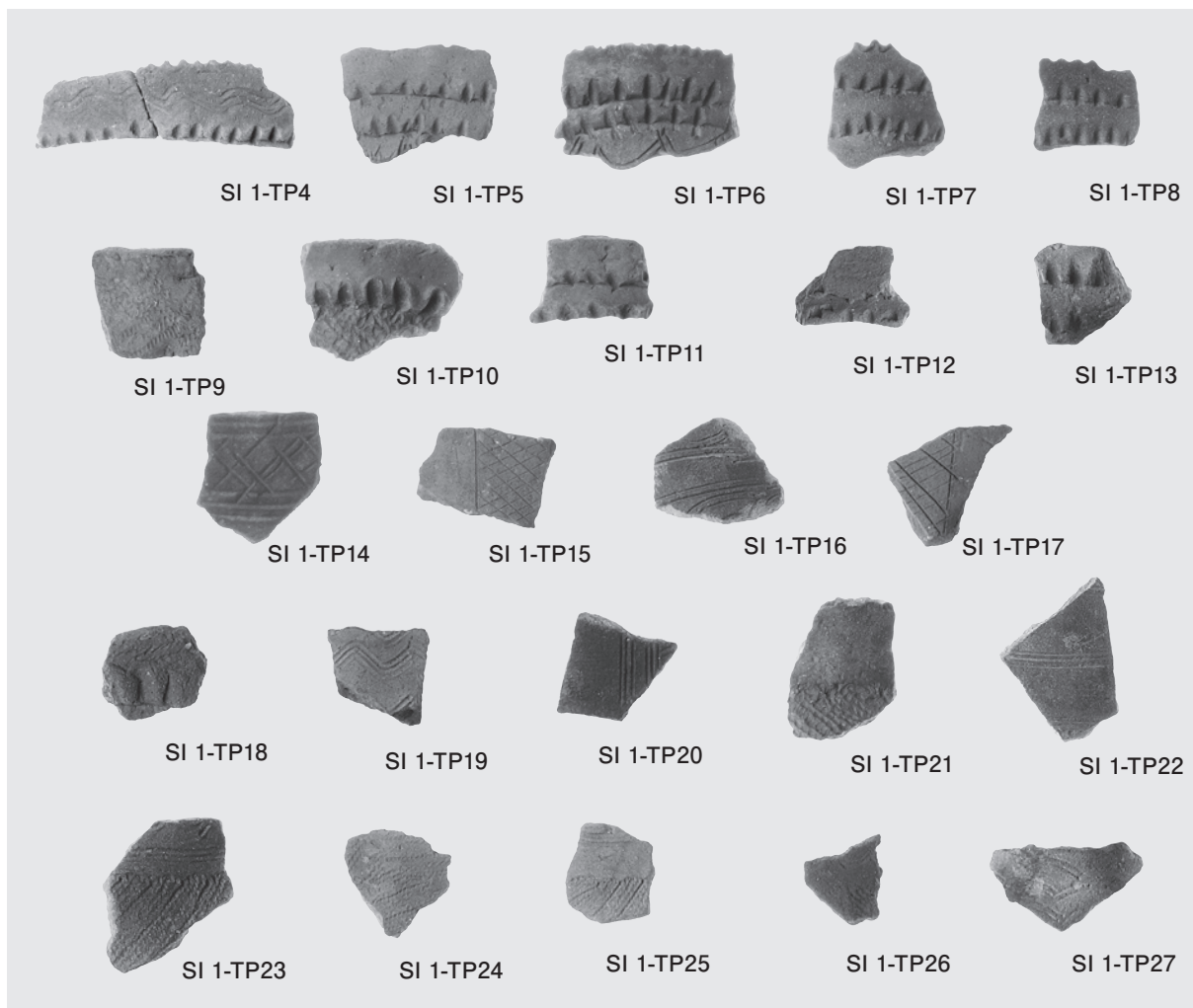


遺構外-Q2



SI 1-Q1

第1・2号住居跡，遺構外出土遺物



第1・2号住居跡出土遺物





# 抄 録

ふりがな	おおさわいせき								
書名	大沢遺跡								
副書名	都市計画道路宿大沢線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書								
巻次									
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第344集								
著者名	前島直人								
編集機関	財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行日	2011(平成23)年3月23日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
大沢遺跡	茨城県笠間市 美原2丁目 1470番地の2008 ほか	08216   321092	36度 20分 39秒	140度 18分 52秒	14   27m	20090801   20090831	960㎡	都市計画道路宿大沢線道路改良事業に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
大沢遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 2軒		弥生土器(壺・手捏土器) 土製品(紡錘車)		第1号住居跡の、炉の周辺と火床部から石英の剥片が多数出土していることから石器加工を行っていた可能性が考えられる。		
	その他	時期不明	土坑 溝跡 5基 1条		縄文土器(深鉢) 土師器(甕) 須恵器(甕) 石器(石鏃)				
要約	<p>当遺跡は、弥生時代後期後半の集落跡の一部と考えられる。竪穴住居跡は調査区の南部に2軒が確認された。第1号竪穴住居跡は長軸5mを超える大形の竪穴住居で、炉が2か所敷設され、炉2周辺部の床面からは土製紡錘車が2点出土し、火床部とその周辺からは石英の剥片が多数出土するなど、石器加工を行っていた可能性が考えられる。出土土器は、二軒屋式・十王台式といった2形式の土器が確認できることなどから、当地域が弥生時代の小文化圏がちょうど交わる場であると同時に、地域間交流が盛んに行われていたことを示す資料と思われる。また、その交流によりそれぞれの土器の特徴を混ぜ合わせた折衷土器の存在も注目していく必要がある。</p> <p>集落の本体は、南東方向に広がるものと考えられる。</p>								

## 印刷仕様

編集 OS Microsoft Windows XP  
Professional Version2002.ServicePack3  
編集 Adobe Indesign CS4  
図版作成 Adobe Illustrator CS4  
写真調整 Adobe Photoshop CS4  
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000  
図面類 EPSON GT-X750  
使用Font OpenType リュウミンPro・L  
写真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上  
印刷 印刷所へは、Adobe Indesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第344集

## 大 沢 遺 跡

都市計画道路宿大沢線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成23（2011）年 3月17日 印刷

平成23（2011）年 3月23日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 八幡印刷株式会社

〒311-4152 茨城県水戸市河和田1丁目1704番12号

TEL 0120-23-1473